



大阪大学の教育目標

鈴木 直*

Educational Target of Osaka University
Key Words : Liberal arts, Design, Internationality

1. はじめに

今回の法人化に際して中期目標・中期計画を作成するに当たり、現在までの実績を背景にして、新しい大阪大学の教育目標をどのように打ち出していくかについては、設置形態検討委員会および法人化準備検討委員会で長い時間をかけた議論を行いました。

まず、大阪大学にはその理念を簡潔に表した標語があります。それは、「地域に生き 世界に伸びる」というモットーで、20数年前に定められたものです。また、平成15年の3月には、11項目からなる「大阪大学憲章」を定めました。1-3には、研究、教育、社会貢献を掲げていますが、これらは全ての大学に共通な項目です。憲章はホームページに掲載されていますので、その他の項目の説明は省きますが、第4番目の項目である「学問の独立性と市民性」だけ触れることにします。この市民性は大阪大学の特色を出した項目で、大阪大学の源流と言われている懐徳堂が5人の町民によって設立されたこと、また、大阪大学そのものも国だけではなく市民・産業界の協力のもとに設立されたという歴史的背景に基づいたものです。

中期目標・中期計画はこれらのモットーと大学憲章をベースに作成されましたが、第1回経営協議会

で中期目標・中期計画を説明した際に、大阪大学のグランドビジョン、特にどのような人材を育成したいと考えているのかのイメージをもう少し明確に出来ないかという指摘を受けました。そこで、4、5月の役員連絡会等で議論して、教育に関する3つの簡潔な目標を掲げました。これについては、平成16年の8月に発行した「役員室だより」や講演会などでも説明してきましたが、大変重要なことですのでこの紙面を借りてもう一度説明させていただきます。

2. 大阪大学の教育目標

確かな基礎学力と高度な専門知識の形成を大前提とした上で、「教養、デザイン力、国際性」という3つの目標を掲げました。それでは、大阪大学の考えている「教養」、「デザイン力」、「国際性」とはどのようなものでしょうか。

●教養

先端医療からメディア環境、住環境、食の安全性まで、現代の先端科学技術は、文明の新しい可能性を開くとともに、市民の日常生活と特にその安全に深くかかわっています。従って、これからの科学技術者は、そういった社会的影響まで深く視野に入れて高度な科学技術にかかわるという研究態度、すなわちそのような教養が求められると考えています。狭い意味での専門主義から脱却し、教養を備えた専門家を私たちは「柔らかい専門家」と呼ぶことにしていますが、別な言葉で言えば、「市民に信頼される科学・技術者」とも言えます。

もうひとつ、教養教育のなかで無視されてはならないのは、「科学的な思考」の素養です。現在、理系の学生の社会的・文化的教養の薄さとともに危惧されるのは、文系学生の自然科学への関心の薄さです。これに対処するため、「科学的思考」のトレーニングを大学全体として活性化して行きたいと考え



* Naoshi SUZUKI
1945年11月生
19年大阪大学大学院・工学研究科・修了
現在、大阪大学・大学院基礎工学研究科・物質創成専攻・未来物質領域、国立大学法人大阪大学理事、大阪大学副学長(総合計画担当)、物理学(物性理論)
TEL 06-6850-6405
FAX 06-6845-4632
E-Mail suzuki@mp.es.osaka-u.ac.jp

ています。

理系・文系と言った分けをせず、市民からあるいは社会から信頼されるに足る教養を付けさせたいと言うことです。

●デザイン力

ここで「デザイン力」とは、単に建築や服飾におけるデザイン力を指すのではなく、広く「構想力」の意味で用いています。異なる分野、異なる知識を編集し、新たな知的領域を創出するイメージーションのことであります。素材や部品を与えられたときにそれをどのように組み立てて良い物を作るかにおいては、総合的なデザイン力が必要になり、単に一つの専門に優れているだけではだめで、先ほど出てきました柔らかい専門家である必要があるということになります。

また、デザイン力の養成は、同時に「グッド・センス」の涵養を意味します。「グッド・センス」には、鋭敏かつ繊細な美的感受性であるのみならず、視野の広い社会的な識見が含まれています。そもそも、センスには識別力という意味もあり、例えば、COMMON・センスはふつう「常識」と訳されますが、本来は、共同生活における正しい判断力を意味します。そういう意味のデザイン力の養成を考えています。

さらに、ここでいうデザインには目に見えるもののデザインだけではなく、今後非常に重要になるであろうと思われるコミュニケーション、そのコミュニケーション技術のデザインと言ったものも含めて考えています。

●国際性

大阪大学で考える国際性とは、単に外国語を話せるだけでなく、異なる文化的背景をもつ人々ときちんとコミュニケーションできる資質のことです。

このために、まずは異文化における生活体験のチャンスを増やすことをめざしています。そのためにも、学部生の留学支援のためのプログラムを早急に立てると同時に、平成16年の春に設置した海外拠点を有効に利用していくことを考えています。

「市民に信頼される研究者・技術者」の育成と併せて、「デザイン力」の育成のために、全学共同利用機関としてのコミュニケーションデザインセンターが平成17年4月に設置される予定です。ここでは、大学と市民が話し合い、協力しあいながら、地域社会の抱え込むさまざまな問題を解決する、そういう

「社会学連携」の姿勢を涵養するために、コミュニケーション能力と「グッド・センス」に磨きをかける、そのような教育事業に取り組みます。具体的には、臨床デザイン、安全デザイン、空間デザインという三つの部門で事業を開始し、将来的にはプロダクツデザイン、メディアデザインなどの領域へと活動を広げていきたいと考えています。

3. 大阪大学の研究を特色づけるキーワード

研究についても今まで以上に大阪大学の特色を出していく必要があります。ただし、総合大学としての大阪大学で行われている研究の幅は非常に広いことと、研究は各研究者の自由な発想に基づいて行われるのが基本であるという観点から、大阪大学としての研究目標を2,3に絞ることは不可能です。そこで、研究については、基盤研究は今まで通りしっかりと継続するという大前提に、大阪大学が目指す研究の特色を、インターフェイスとネットワークという二つのキーワードにまとめました。

インターフェイスは科学用語としては異なる物質が接するところ、すなわち「界面」を意味しますが、ここではそれに留まらず、異なる学問領域あるいは異なる文化の接するところ等も含めて考えます。歴史から分かるように、異文化が接することによりたくさん新しい文化が生まれてきました。インターフェイスでは活発な相互作用が発して、そこから新しいものが生まれていくというわけです。異分野の融合や連携により、常に新しい学問領域を生み出していくのだという気持ちをインターフェイスという言葉に込めています。

ネットワークという言葉には沢山の学問領域が有機的に連携してどんどん新しい学問領域を創成していくという気持ちと社会などからの多様な要請・要望に迅速に応えうる柔軟な研究組織を構築するのだという気持ちを込めています。従って、この言葉には、産学連携のみならず、市民や社会との連携すなわち社会学連携、さらには国内外の国公立大学・研究所との連携などを含めて考えています。

ところで、インターフェイスで新しいものが生まれるためには、異なるもの同士の間での相互作用、場合によっては競争といっても良いほどの強い相互作用が必要です。その観点からインターフェイスには“競争”という意味が込められていると考えています。

一方、ネットワークには当然、連携と言う意味が込められていますが、私たちは連携の代わりに、“協奏”(協奏曲の協奏すなわち力を合わせて奏でる)という言葉で言い表すことにしました。協奏曲ではそれぞれ個性を持った楽器が力を発揮して初めてすばらしいハーモニーが生まれるわけですが、皆で渡れば怖くない方式の横並びの連携でなく、個性あるもの同士がそれぞれの役目を十分に発揮した連携が重

要であるという意味を込めて、協奏という言葉を用いることにしたものです。法人化に際して、競争ばかりが強調されがちですが、日本の将来のためには、二つのきょうそう、“競争”と“協奏”，のバランスが大切だと考えています。

この拙文は平成16年9月28日に開催された大学・経済人会議第4回調査研究委員会で講演した内容の一部をまとめたものです。

